

☆復活節第2主日(4月16日)の聖書朗読☆※主任司祭からの解説があります。

第一朗読 (使徒たちの宣教 2章 42-47節)

信徒は、使徒の教え、相互の交わり、パンを裂くこと、祈ることに熱心であった。すべての人に恐れが生じた。使徒たちによって多くの不思議な業としるしが行われていたのである。信者たちは皆一つになって、すべての物を共有にし、財産や持ち物を売り、おのこの必要に応じて、皆がそれを分け合った。そして、毎日ひたすら心を一つにして神殿に参り、家ごとに集まってパンを裂き、喜びと真心をもって一緒に食事をし、神を賛美していたので、民衆全体から好意を寄せられた。こうして、主は救われる人々を日々仲間に加え一つにされたのである。

第二朗読 (使徒ペトロの手紙 I 1章 3-9節)

わたしたちの主イエス・キリストの父である神が、ほめたたえられますように。神は豊かな憐れみにより、わたしたちを新たに生まれさせ、死者の中からのイエス・キリストの復活によって、生き生きとした希望を与え、また、あなたがたのために天に蓄えられている、朽ちず、汚れず、しぼまない財産を受け継ぐ者としてくださいました。あなたがたは、終わりの時に現されるように準備されている救いを受けるために、神の力により、信仰によって守られています。それゆえ、あなたがたは、心から喜んでいるのです。今しばらくの間、いろいろな試練に悩まねばならないかもしれませんが、あなたがたの信仰は、その試練によって本物と証明され、火で精錬されながらも朽ちるほかない金よりはるかに尊くて、イエス・キリストが現れるときには、称賛と光栄と誉れとをもたらすのです。あなたがたは、キリストを見たことがないのに愛し、今見なくても信じており、言葉では言い尽くせないすばらしい喜びに満ちあふれています。それは、あなたがたが信仰の実りとして魂の救いを受けているからです。

福音朗読 (ヨハネ 20 章 19-31 節)

その日、すなわち週の初めの日の夕方、弟子たちはユダヤ人を恐れて、自分たちのいる家の戸に鍵をかけていた。そこへ、イエスが来て真ん中に立ち、「あなたがたに平和があるように」と言われた。そう言って、手とわき腹とをお見せになった。弟子たちは、主を見て喜んだ。イエスは重ねて言われた。「あなたがたに平和があるように。父がわたしをお遣わしになったように、わたしもあなたがたを遣わす。」そう言ってから、彼らに息を吹きかけて言われた。「聖霊を受けなさい。だれの罪でも、あなたがたが赦せば、その罪は赦される。だれの罪でも、あなたがたが赦さなければ、赦されないまま残る。」十二人の一人でディディモと呼ばれるトマスは、イエスが来られたとき、彼らと一緒にいなかった。そこで、ほかの弟子たちが、「わたしたちは主を見た」と言うと、トマスは言った。「あの方の手に釘の跡を見、この指を釘跡に入れてみなければ、また、この手をそのわき腹に入れてみなければ、わたしは決して信じない。」

さて八日の後、弟子たちはまた家の中におり、トマスも一緒にいた。戸にはみな鍵がかけてあったのに、イエスが来て真ん中に立ち、「あなたがたに平和があるように」と言われた。それから、トマスに言われた。「あなたの指をここに当てて、わたしの手を見なさい。また、あなたの手を伸ばし、わたしのわき腹に入れなさい。信じない者ではなく、信じる者になりなさい。」トマスは答えて、「わたしの主、わたしの神よ」と言った。イエスはトマスに言われた。「わたしを見たから信じたのか。見ないのに信じる人は、幸いである。」このほかにも、イエスは弟子たちの前で、多くのしるしをなさったが、それはこの書物に書かれていない。これらのことが書かれたのは、あなたがたが、イエスは神の子メシアであると信じるためであり、また、信じてイエスの名により命を受けるためである。

朗読解説 一主任司祭より皆様へ一

恵みの雨が降っています。このところ晴れの日が多く風も強くそれに黄砂まで飛んできていたので、ちょうどよい雨です。今年は復活祭と年度の

始まりの式が重なっていましたので忙しいことは忙しかったですが、気持ちの上では「さあやるぞ！」という気分になりました。イエスを囲む弟子たちも復活されたイエスに出会って、戸惑いながらも喜びにあふれていますね。私たち足立教会の皆さまも久しぶりに園庭で良い天気恵まれてパーティーを開くことが出来ました。準備して下さった皆様に感謝いたします。これからは少しずつ平常の活動が再開されていけばいいと思います。ところで、今日の主日は「神の慈しみの主日」とされて、神の慈しみを思い出すよう教会は求めています。この「神の慈しみ」は今回のミサ式文が改められるに伴い、特に強調されている気がします。「憐みの賛歌」が「慈しみの賛歌」に変わったように。「憐れむ神」から「慈しむ神」への転換でしょうか。深い意味がありそうです。

第一朗読 (使徒たちの宣教 2章 42-47節)

初代教会の信徒の皆さんの生き生きとした祈りと共同生活が描かれています。パンを裂くこととは、イエスがなされたこと、そしてそれを記念して行い続けることを命じられたことによって、現在に至るまで続けられている最初の頃のミサを表しています。そしてその生活ぶりは当時の民衆全体から好意を持たれていたようです。当時の人々にとってとても新鮮な教えだったのでしょうね。食べ物の少ない時代だったので、皆で分け合っていたのでしょう。初代教会の分かち合いの精神が生き生きと記されています。私たちも自分たち教会のことだけでなくもう少し広がりのある分かち合いが必要だと感じます。

第二朗読 (使徒ペトロの手紙 I 1章 3-9節)

この手紙は初代教会の洗礼式の時の説教で使われた内容がもとになっていると言われています。主の復活の祝いの時に多くの洗礼が行われていたようで、受洗した人たちのみならずすでに洗礼を受けた人たちのためにも要理教授(カテケジズ)が行われていたのです。また当時はすでに迫害があったようでその苦しみの意味も記されています。あなたがたの信仰はその試練によって本物と証明され」と言われているのです。今の現代に

おいても世界各地で信仰生活のために圧迫を受けている方々がおられることを考え祈りましょう。「あなたがたはキリストを見たことがないのに愛し、今見なくても・・・」と述べて、新しく洗礼を受けられた人たちにエールを送っています。

福音朗読 (ヨハネ 20 章 19-31 節)

イエス・キリストの使命は人間の罪の償いを背負って十字架の死によって贖いを実現することでした。したがってイエス・キリストの死と復活はそのことの完遂でした。それにより人間の罪による死も、イエス・キリストの死と復活で打ち砕かれ、神の内に生き続けることができるようになったのです。復活を遂げたイエスは父なる神から託された弟子たちを励まし力づけることとなります。聖霊を授け、イエスを見なくても信じる人たちに向けて祝福を送られるのです。これは今の私たちに向けてのエールなのです。



主イエスは復活された (2021 年 復活祭).

カトリック足立教会
主任司祭 野口重光